日本におけるモザイク壁画の保存修復に関する研究

東京藝術大学大学院美術研究科
文化財保存学専攻保存修復研究領域（壁画）
鈴 村 敦 夫

（博士論文要旨）

本研究は、日本のモザイク壁画の保存修復に関して、とりわけ1950年代後半から1970年代前半、日本におけるモザイクの黄金期に制作されたモザイク壁画の移設保存から浮かび上がる諸問題を、歴史的、社会文化的、美術的、科学的な観点から論じたものである。

日本では、明治維新以降の本格的な西洋建築の導入に伴い、モザイクが建築装飾の一技法として導入され始めた。特に戦後の高度経済成長期には建設ラッシュが起こり、都市空間に多くのモザイク壁画が設置された。ところが近年、都市再開発が実施される中で、戦後のモダニズム建築は建築素材の老朽化等による取り壊しや建て替えが進められ、建造物と一体化したモザイク壁画は、その素材の耐久性あるいは文化的価値とは裏腹に、取り壊しや移設、保存修復の選択に迫られている。

東京2020オリンピック競技大会の開催に向けて改築された国立霞ヶ丘競技場においても、13点の貴重な大型モザイク壁画が設置されていた。改築にあたり当初これらのモザイク壁画は、長谷川路可の2作品の保存が決まり、残りの11作品の取り扱いが有識者会議で検討された。その結果、最終的に全てのモザイク壁画が新たな国立競技場へ移設保存されることに変更された。しかし、このような事例の一方では、社会に存在する貴重な多くのモザイク壁画が有識者の意見とは裏腹に、移設保存先の確保困難等の物理的要因によって取り壊されている。設置から100年も経たず消失した壁画作品は数知れない。

日本において、モザイク壁画の保存修復の重要性の認識や問題意識がきわめて希薄と言わざるを得ない。ではその原因は何であろうか。日本のモザイクの歴史の浅さもさることながら日本近代美術史におけるモザイク壁画の位置付けが曖昧であり、文化的価値が認められていないことが考えられる。そして欧米と比較しても建て替えのサイクルが早い日本では、現存するモザイク壁画作品も今後失われていく可能性があり、早急にモザイク壁画の保存意義の検討と指針をまとめる必要に迫られている。さらに、筆者は本研究がモザイク壁画の保存修復事例をアーカイブすることは重要と考える。アーカイブ化された保存修復事例は将来の壁画の保存問題に参考事例として役立ち、さらに修復事例からうかがえる理想的なモザイク壁画制作と設置工法の両者を提示す

ることができる。

第1章では、世界のモザイク史を概観した上で、日本におけるモザイク史を取り上げた。日本でどのようにモザイクが受容されたのか、近代建築の変遷とともにその足取りを辿った。また、建築の装飾を超えて「絵画」としてのモザイク壁画が確立される黄金期までを、その時代背景やモザイクを牽引してきた技術者、建築家、作家を中心に総括し、日本の近代美術史におけるモザイク壁画の位置付けを考察する。

第2章では、旧国立競技場のモザイク壁画13点を始めとして、筆者が関わることのできたモザイク壁画の保存修復事例を紹介する。本章に収めた限られた事例からもわかるように、モザイク壁画は設置環境や保存を検討する際に与えられる条件が様々であることから、浮上する問題も多岐にわたる。だからこそ、修復事例のアーカイブ化を進めることは重要であり、蓄積されたデータが将来的にモザイク壁画の保存修復を検討する際の有用な参考資料となると考える。

第3章では、前章の保存修復事例をもとに、モザイク壁画の保存修復が抱える問題の本質を探り、その可能性を多角的に考察した。壁画の寿命が建造物の寿命と同じという構図になっている原因を明らかにするため、モザイク壁画の保存修復で浮上する諸問題を、物理的な問題と壁画の保存を取り巻く環境の問題に分けて整理し、その解決の糸口を探った。さらに本章の考察に基づき、モザイク壁画の保存修復のあり方や手法、その手順を提案するとともに、実践として将来的な保存修復を見据えたモザイク壁画制作と設置を行った。そして最後に、従来の枠に当てはまらない新たな保存手法と「芸術資源」としての活用を考えるケーススタディとして、筆者が協力者として関わった、現代美術作家・日比野克彦氏のアトリエ玄関のタイルモザイクの移設に関する内容を本論に収めた。

本研究により、近代日本で作られた文化的価値のあるモザイク壁画が抱える保存修復の諸問題を多角的な視点から考察し、その実態や課題を明らかにできたことは大きな成果と言える。また本研究で得られた情報が、保存修復事例のアーカイブ化を進める足掛かりとなり、今後の都市開発において、モザイク壁画の保存意義を検討する上で有用になると考える。